

「小さな親切」運動 栃木支部

第46回作文・標語コンクール入賞作品

「小さな親切」運動本部

できる親切はみんなでしよう それが社会の習慣となるように



令和2年9月29日（火）

「小さな親切」運動とは

昭和38年3月、東京大学の卒業式において、当時の茅誠司学長が、告辞の中で卒業生に贈った言葉が、下記の言葉です。

「小さな親切」を勇気をもってやっていただきたい。
そしてそれがやがては、日本の社会の隅々まで埋めつくすであろう、親切という雪崩れの芽としていただきたい。

これがきっかけとなって、この年の6月13日、茅学長をはじめ阿部真之介氏（当時、NHK会長。以下同じ）、上田常隆氏（毎日新聞社長）、栗田確也氏（栗田書店社長）、坂西志保氏（評論家）、上代たの氏（日本女子大学学長）、渋沢敬三氏（実業家）、原安三郎氏（日本化薬社長）の8名が提唱者となり、「小さな親切」運動が発足しました。

以来、50年以上にわたって、“できる親切は、みんなでしょう。それが社会の習慣となるように。”をスローガンに運動を推進、「小さな親切」運動は、日本中に広がりました。道府県に本部、市町村に支部が結成され、ますます運動は充実し、運動参加者総数は284万人を超えるまでになりました。

21世紀になって、日本はもとより世界中が大きく変化しています。このような時代だからこそ、私たちは「小さな親切」運動を通して、思いやりあふれる、心のかよう社会づくりを目指したいと考えています。

「小さな親切」八か条

- 1 朝夕のあいさつをかならずしましょう。
- 2 はっきりした声で返事をしましょう。
- 3 他人からの親切を心からうけ入れ、「ありがとう」といしましょう。
- 4 人から「ありがとう」といわれたら、「どういたしまして」といしましょう。
- 5 紙くずなどをやたらにすてないようにしましょう。
- 6 電車やバスの中で、お年寄りや赤ちゃんをだいたお母さんには、席をゆずりましょう。
- 7 人が困っているのを見たら、手つだってあげましょう。
- 8 他人のめいわくになることは、やめましょう。

【この八か条は、日常生活の基本です。】

小さな親切

栃木市立大平南小学校 三年 小澤明紗

お母さんとスーパーマーケットに行きました。ちゅう車場に車をとめてお店に入ろうとしたら買い物カートが、ちゅう車場におきっぱなしになっていました。お母さんは、そのカートをお店のカートをおくところまでおしていきました。どうしてカートをかたづけけたか聞きました。

「カートがおいてあると車がとめられないし、風がふいたらカートがとまっている車にぶつかるかもしれないでしょ。」

と書いていました。わたしは買い物してカートをかたづけけない人がわるいの、何も言わないでかたづけるお母さんはすごいなと思いました。わたしもちゅう車場にカートがおきっぱなしになっているのを見たときは、カートをかたづけるようにしました。かたづけるととても気もちがよくなりました。

ある日、おじいちゃん、おばあちゃんと買い物に行ったときです。ちゅう車場がこんでいて、なかなか車がとめられませんでした。やっと空いているところを見つけました。が、カートがおきっぱなしで車がとめられなくて、おじいちゃんはこまっていました。

「わたしカートをかたづけてくる。」
おじいちゃんに言いました。車からおりてカートをかたづけて、おじいちゃんの車をとめることができました。おじいちゃんは、
「ありがとう。」

と言ってくれました。

「おきっぱなしのカートがあったときはいつもかたづけているんだよ。」
と言いました。

「心ない人がおきっぱなしにしたカートをかたづけるなんて、なかなかできることじゃないよ。みんなのやくに立ってえらいね。」
とおばあちゃんが言いました。

「かたづけはすごい事だけど車にも気をつけないとね。」
とおじいちゃんが心ぱいしてくれました。「この時わたしがいつもやっていることが、みんなのやくに立っていることにはじめて気づきました。」

あまりほめられたり、ありがとうと言われることはないけど、家族やおじいちゃん、おばあちゃん、みんながきちんと車をとめられたり、車にぶつかったりしないように、これからもかたづけをつづけていきたいです。わたしだけでなくみんながかたづけてくれば、みんながこまったりしないし、おきっぱなしのかーとがなくなるのがいちばんいいなと思います。



まほうのばんそうこう

栃木市立小平西小学校 四年 早川幸来

私は今年四年生になり、上級生の仲間入りをしました。小学校生活も折り返しです。近所には新しい一年生もたくさんいて毎朝いっしょに登校しています。私の家から学校までは、とても遠いです。四年生になった今でも暑い日や寒い日は特に、遠く感じるこゝとがあります。一年生はなお大変だろうなと思いつながら、毎日歩いています。最近以前にあつたこんな出来事を思い出しました。

私がまだ一年生の時、今よりもランドセルが重く、そして学校がとても遠く感じていたこととです。私は毎日、班長の五年生の男の子のせなかをおいにかけて一生けんめい歩いていました。時々私を気にかけてか、ふり返ってくれたけれど、ほとんど話もしたことありませんでした。とてもものしずかな班長でした。

ある日、登校途中で、私は道のだんさにつまづいて転んでしまいました。重たいランドセルが私の体をたおし、そのまま顔から転んでしまいました。

「いたい、いたい・・・。」

小石がおでこのきず口にささり、血も流れてきました。

「だいじょうぶ?」

「もう少しで学校だからね。」

「学校についたら、保健室にすぐに行こう。」

と、班のみんなが声を掛けてくれました。その声のおかげで、私の涙はひっこみました。

その様子をだまってみていた班長さんは、思いついたようにあわてて自分のランドセルを開けて何かを取り出しました。ばんそうこうでした。そして、だまって、そっと、私のおでこにはつけてくれました。その時、私の心がじんわりと温かくなりました。

学校についてすぐに、保健室に行きました。大きなたんこぶに出血の量も多かったので保健室の先生がおどろき、すぐにお母さんに電話をしました。お母さんもあわててかっつけてくれました。

「すごいきずだから、帰りましょう。家で様子を見ましょう。」
と、お母さんがとても心配していましたが、私は、

「ぜんぜんだいじょうぶ。もう痛くないよ。がんばれるよ。」
と、すぐに答えました。私は、その日早退もすることなく、一日すごすことができました。それは、班のみんなの温かくてやさしい言葉やはげまし、そして班長さんのあのまほうのようなばんそうこうのおかげだと思っています。

あの日から私は、ハンカチとティッシュを入れるポシエットの中に、ばんそうこうを何枚かいつも入れて、毎日欠かさず身につけています。あの時の班のみんなのように、あたたかい言葉をだれに対してもかけることが出来る人になりたいです。そして、あの班長さんのようなやさしさ・心配りを大切にしていきたいと思います。



陽兄、ありがとう

栃木市立栃木西小学校 五年 小幡陽生

聖空は二年前、ぼくたちの街に来た。聖空は、幸兄とよんでいるぼくのおじさんの子どもだ。ぼくは幸兄に、

「新しいいこの聖空だよ。よろしくね。」
と言われ、少しわくわくした気分になった。聖空はその時まだようち園生、ぼくより四才年下だ。ぼくは弟が出来た様でうれしかった。

ところが、最初はおとなしかった聖空が、だんだん生意気に感じる様になった。とつ然大きな声でさげんだり、ぼくの家の冷ぞう庫を勝手に開けたり、部屋を散らかしたり。注意をしても「やだ!!」と言って全然言う事を聞いてくれない。ぼくもだんだん聖空と遊ぶのがいやになり、大好きなおじいちゃんの家も、聖空がいるから行きたくないと思う事がふえていった。

そんなある日、幸兄が聖空のために自転車を買って来た。幸兄がぼくに言うのだ。

「陽生は、上手に自転車に乗れるよな。聖空はまだ乗れないんだ。陽生が聖空に乗り方を教えてやってくれないかな。」

正直言って、いやだなと思った。どうせ泣いたりわがまま言ったりしてぼくにめいわくをかけるに決まってる。宿題があるからと言ってことわってしまおうかなと思ったその時、ぼくが自転車に乗れる様になった時の事を思い出した。何度も転んで何度も泣いて、ひざからたくさん血が出て。もう自転車になんか乗れなくなっていていい!そう思って

も、お父さんもお母さんも暗くなるまでぼくに付き合ってくれた。そして、乗れる様になった時のうれしさときたら格別だった。歩く時の何倍ものスピードで流れて行く景色、歩いては行けなかった所まで行ける様になった喜び。それは、乗れる様にならないと味わえないものだ。

ぼくは、聖空にも乗れる様になってほしいな、と思った。後ろを支えてあげたり自分が乗っている所を見せたりしながら、何度も教えてあげた。思った通り聖空はたくさん泣いた。わがままもいっぱい言った。でも最初は全く進まなかった聖空の自転車が、二m三m。気が付けば五m十mとどんどんきよりをのばしていったのだ。その度に、泣いてばかりだった聖空の顔に笑顔がふえる。その日の内に、聖空は苦手だった自転車を、まるで自分の手足の様に自由に使いこなせる様になっていた。そしてぼくにっこりとした顔でこう言った。

「陽兄、ありがとう!!」

その言葉を聞いて、ぼくはとてもうれしくなった。自分が自転車に乗れる様になった日と同じ位、むねがギュツと熱くなった。

その日以来、聖空と遊ぶ機会がふえた。ゲームをしたり、水鉄砲うでずぶぬれになったり、おたがいの家族と一緒に旅行をした。



一番楽しいのは、二人で自転車に乗って、近所の竹林までツーリングに行く事だ。いやだと思った聖空も今年一年生。一緒に学校に行くのが楽しみな、ぼくの最高のいとこだ。

甘い夏の思い出

栃木市立栃木西中学校 三年 新村日奈子

「行ってきまーす。」

去年の夏、私は車ら飛び降り、市内の夏祭りに行った。そして、大好きな綿あめ屋さんの列に並んだ。いちご味、レモン味、メロン味の看板があった。どれもおいしそうだけど、すぐに決まった。いちご味だ。私は小さい頃からいちごが大好きなので、赤くて甘い「いちご」を想像するだけで、口の中が甘く幸せな気分になる。「いちご味を下さい。」と、言っと、店員さんが

「あとちよっとだけしかないから、少し小さくなっちゃうけどいい？」と聞いてきた。

そのとき、すぐ後ろで小さな女の子の声が出た。

「私、いちご味がいい。」

私は思わず、店員さんに聞いた。

「いちご味は、これが最後ですか？」

店員さんは「最後の一つ」と言ったので、後ろを振り向いた。

おばあさんは、女の子に、

「いちご味はもうないんだよ。違う味を選ぼうね。」

と言っと、女の子は、おばあさんの服をつかんで

「いちご味じゃなきゃ、やだ。」

と、眉間にしわを寄せ、体を振りながら泣きそうな顔をしていた。すると、おばあさんは「もうないんだよ。」と、つらそうな顔で女の子をなだめた。店員さんが最後のいちご味の綿あめを差し出した。

そのとき、私は自然と体が動いた。あめを受け取り、後ろの女の子に渡した。

「お姉ちゃん、ありがとう。」

と、女の子は笑顔で言った。

「どういたしまして。」

と、私も笑顔で言葉を返すと、おばあさんが

「本当にありがとう。孫は横浜から来ているから、長い休みの時しか会えないの。だから少しでも良い思い出を作らせてあげたかったの。あなたのおかげで、この子も嬉しいお祭りが心に残ったと思うわ。本当にありがとう。」

と、私の手を握りしめながら、何度もおじぎをして立ち去った。

笑顔のおばあさんと手をつないで、うれしそうにぴよんぴよん飛び跳ねている女の子を見て、いちご味の綿あめをゆずって本当に良かったと思った。立ち去る女の子とおばあさんは、何度も振り返っておじぎして、手を振って別れた。私には、今でもそのときのおばあさんの手のぬくもりが残っている。あの日の出来事を思い出すと、あたたかい気持ちが入みあげてくる。私は小さな親切でおばあさんから大きなやさしい気持ちをもらった気がする。



「二人は、どんな関係なんですか。」

母と「コンビ」で買い物をして、レジでお会計をしていると、店員さんに聞かれた。

「親子です。」

と、私が答えると、

「やっぱりそうですよね。今、お母さんに“ありがとうございます”と言っているのを聞いて、感動してしまいました。」

そう言っている店員さんの顔を見ると、目が少しうるんでいたもので、ドキッとした。

自分は、ほしい物を買ってもらい、母から品物をわたされたので、お礼を言っただけに、それだけで感動してもらえるなんて、不思議に思った。そんな私の気持ちに店員さんは気付いたのか、

「私は、子どもに買ってあげても“ありがとうございます”なんて言われたことなくて、親に伝えることは、素晴らしいなって心が震えてしまったの。今まで、レジをしないで、初めてこんな光景を見たんです。温かい気持ちになれました。ありがとうございます。」
と、言われた。なんだか、くすぐったかった。でも、こんなことでお礼を言われたのは、初めてで、心の底が、じんわりと熱くなるのを感じながら、

「ありがとうございます。」
と、店員さんに頭を下げて、お店を出た。

車で待っていた父に、お店でのことを話した。照れもあった私は、「そんなにほめてもらえることかな。」

と、言う。

「家族だから、当たり前前とか、言わなくても分かると思って、ついつい感謝の気持ちを口に出さなかったりするけれど、成奈子は、何かしてもらうと、誰にでもきちんとして、ありがとう」と言っているから、素敵だなんて、いつも思っていたんだよ。」

と、父が言ってくれた。

そして、父はこうつけ加えた。

「成奈子、どうしたらやさしい人になれるか知ってる。やさしい人になりたいなら、やさしい人をよく見ることだよ。ただ見ているだけでいいから、よく見ること。成奈子は、お母さんが大好きで、いつもお母さんにくっついていて、お母さんをよく見ていたでしょう。だから、いつの間にか、お母さんのように、やさしくて、ありがとうを自然に言えるようになったと思うよ。だからお母さんに感謝しようね。」

たった五文字の「ありがとう」の言葉は、言った方も言われた方も、温かい気持ちになれる力を持っている。でも、そのたった五文字が、ときには人の心も動かすことができる。と知った。「ありがとう」は人の心と心をつなぐ言葉だと思う。だから、これからも、小さなことでも気付いたら、ありがとうの言葉を発信し続けたい。



